女性
リレートーク

土木と私のこれまでとこれから



株式会社本間組　土木事業本部　土木企画部　土木企画課 ● 鈴木（すずき）　敦子（あつこ）

自己紹介

私は新潟で生まれ育ちました。新潟と聞いて「お米」「お酒」「田んぼ」「雪」などを思い浮かべる方も多いかと思いますが、皆さんのイメージどおり、山も海もある自然豊かな地域です。幼少期には用水路でメダカを捕まえ、毎年夏には海水浴に出かけ、冬には除雪車が空き地にまとめた雪山で遊んでいました。当時はその身近な環境の中に建設業が関わっていることなど考えたこともなく、当たり前のものとして享受していました。

大学進学を機に県外へ出て、化学を専攻しました。研究テーマには無機化学を選択し、実験室で粉末試料を合成する日々を送っていました。就職を意識するようになるにつれ、学んだことを生かしつつ、人と関わる働き方に興味を持つようになりました。実験室にこもる生活を続ける中で、生活の身近なところで役に立ち、人の顔が見える仕事をしたいという思いが強くなったためです。



自社船「第五越後」船内にて

就職活動を進める中で、本間組が化学専攻の人材を募集していることを知りました。建設分野では、材料特性の理解や環境への配慮など、化学的な知見が求められる場面も多くあります。化学の専門性を生かせる点に加え、海に開かれ発展してきた新潟という地域に根ざし、陸上土木、海洋土木および建築と幅広い分野に取り組む企業であることにも魅力を感じ、当社への就職を決めました。

これまでの業務

土木技術者として入社した当初は、現在ほど女性土木技術者の活躍が一般的ではなく、当社においても現場に女性技術者はいませんでした。土木に関する知識がほとんどなかった私は、基礎から学ぶため、現場ではなく現場を技術的に支援する技術部へ配属されることとなりました。配属当初は、土木用語や図面の見方など分からないことばかりでしたが、先輩方の丁寧なご指導のもと、四苦八苦しながら設計照査や数量計算、各種検討業務を経験しました。

学生時代の化学の成果は社会とのつながりが見えにくいものでしたが、土木では、成果が社会基盤として形となり、多くの人の生活を支えることが明確に見えるため、仕事としての意義ややりがいを感じました。

入社4年目には工事課へ異動となり、港湾工事現場で約3年間、施工管理を経験しました。ちょうど同じ頃、世間では「ドボジョ」や「けんせつ小町」といった言葉が注目されはじめていました。当時の現場では、女性が現場にいること自体が珍しく、協



ケーソン製作現場にて、協力業者の皆さんと

力業者の方々も戸惑われていました。そのような環境の中で、現場経験が浅いことを前向きに受け止め、協力業者の方々と積極的に会話し、常に笑顔で向き合うことで、少しずつ現場に馴染んでいきました。先輩職員や協力業者の皆様に温かく支えていただいたことは、今も大きな支えとなっています。

入社7年目以降は現場を離れ、再び内勤業務となり、自社技術の研究・開発業務に携わりました。土木学会、技術発表会、展示会などにおいて自社技術を外部に発表する機会にも恵まれ、技術者としての視野を広げることができました。

そして現在は、技術提案に関する業務を担当しています。化学分野で培った、現象を分解し要因を整理する考え方に、これまでの現場経験や技術開発業務で得た知見を掛け合わせ、施工性・安全性・環境への配慮を踏まえた提案を心がけています。

これからの建設業

私が現場に配属された当時、女性技術者が現場で働くことはまだ珍しく、「男女別トイレを設置したよ」と言われたことを今でも覚えています。現在では当たり前となっている設備も、当時はまだ一般的ではなく、現場環境は必ずしも十分に整えられているとは言えませんでした。また、現場は工事進捗が最優先とされ、休日についても十分に配慮されていなかったように感じます。

しかし、この10年ほどで建設業の現場環境は大きく変化してきたと感じています。男女別トイレの設置が標準となり、きちんと休むことが推奨されるなど、業界全体で働き方の見直しが進められています。

建設現場では、普段の生活の中では当たり前に成り立っている環境や仕組みがそのまま通用しない場面が多くあります。私自身も現場に勤務していた当時は「建設現場とはそういうものだ」と考え、不便さを受け入れていました。しかし若手が働きにくいと感じる環境は、本来、経験を積んだ先輩にとっても決して働きやすい環境ではないはずです。長年そのような状況に身を置く中で、慣れてしまっているだけなのではないかと考えるようになりました。

これからは「仕方がない」という一言で片づけてしまうのではなく、現場で働く誰もが働きやすい快適な環境を整えることが現場の生産性向上や品質確保につながり、結果として建設業全体の魅力を高めることにつながると考えています。ICT施工や自動化といった新しい技術の導入も含め、現場の在り方を常に見直し、より良い形を模索し続ける姿勢がこれからの建設業には求められていると感じています。

変化は一朝一夕に進むものではありませんが、現場で働く一人ひとりが無理なく力を発揮できる環境を整えていくことが次の世代へ建設業をつないでいくための重要な取り組みであると考えています。私自身もこれまでの経験を踏まえ、現場と向き合いながらより良い現場づくりにつながる技術や仕組みを模索し続けていきたいと思います。

鈴木さんからのバトンをしっかりと受け取りました。

次号では、普段私が行っている仕事内容や仕事のやりがいについて、また、私が初めて工場製作から現場据付まで現場代理人として工事に携わり経験したことや感じたことなどについてもお話ししたいと思います。



日東河川工業株式会社
生産本部　購買課

林（はやし）　明希美（あきみ）